

伊勢物語の地理的考察

国語班 島田 詩子

1、はじめに

私は伊勢物語を地理的に考察してみた。私が伊勢物語を地理的に調べてみようと思った理由は、伊勢物語を地理的な面からみている文献があまりなく、インターネットで検索してもでてこなかったからだ。だから先入観にとらわれずに、取り組めると思い、参考資料の少ないこの課題に取り組もうと思ったのだ。

2、地理的考察

伊勢物語は125段から構成されている。物語の作者やいつ物語がつくられたのかという詳しいことは不明であるが、主人公が出会うさまざまな女性との恋の話とともに和歌がのせられている歌物語である。伊勢物語には多くの地名が出てくるがそれらがどのあたりにあるもののかを調べるために、まず伊勢物語に出てきた地名を段落ごとに抜き出してまとめ、地図と照らし合わせてその場所を確認してみた。ここから分かったことは、基本的に話の中心となっているのは、近畿圏の場所で、特に京であるということ以外に、①話を面白くするために脚色されているところがある。②伊勢物語は時系列にそって書かれていない。ということである。

まず①についての考察理由であるが、その理由としては、東下りの「七」段から「九」段にかけての地名を追っていくと(図1)のよう

になるからだ。「七」段では尾張(愛知)にいて、そこから「八」段では信濃(長野)に行っている。しかし「九」段では三河(愛知)、と尾張のとなりに戻ってきているのがわかる。東へ行くために旅をしているのに、信濃から三河にひきかえす理由がみあたらない。また、ここindeでくる浅間山は、長野県北佐久郡及び、御代田町と群馬県吾妻郡嬭恋村との境にある安山岩質の標高2568メートルの火山である。本文には、浅間山に煙が立つのをみて、信濃なる浅間の嶽に立つけぶりをちこち人の見やはとがめぬ(信濃の国にある浅間山に立つ煙 あちこちの人が見咎めないのだろうか、いや見咎めるだろう)、とあることから、作者が実際に浅間山の煙を見たことが伺える。しかし、浅間山の実際の位置からすると、浅間山のすぐ近くには日本アルプスのひとつである赤石山脈がある(図2参照)。赤石山脈の山の多くが3000メートルを越える山々であることから考えると、赤石山脈を越えなければ、浅間山から立ちのぼる煙は見ることはできないと思われる。またこの赤石山脈を越えることは、当時の平安時代の人々にとっては、たやすいことではなかったということは、容易に想像がつく。たとえこの山脈をこえることができたとしてもやはりわざわざ尾張から信濃にいき、赤石山脈を越え、上野(群馬)との境に行っておきながらまた赤石山脈を越え、引き返すようなことは考えづらい。そして、浅間は東山道であり、普通知られている東海道では浅間方面に行かないということもあげられる。これらの理由から、「七」段から「九」段は実際に通った道順とは異なっていると考えられる理由のひとつである。

続いて、②についての考察理由である。伊勢物語の本文では、「六一」段に筑紫（九州）、「二一五」「二一六」段には陸奥（東北）での話になっており、その段の前後で展開されている話の舞台からいきなり離れたかたちになっている。このことから、陸奥での話は東下りの段の話であるが、後から挿入されたものである可能性が考えられる。よって、伊勢物語は段の並びが時系列に沿っていないことが指摘できるのではないかと考える。

以上、私が今回、伊勢物語を地理的な面に注目して考察したことである。全体的な感想としては、調査は楽しく感じることもあったが、資料から読み取るのが本当に大変だった。しかし自分自身で考え、そしてそこから分かることを発表するという機会はこれからもたくさんあると思うので、そのようなときは、今回の経験を生かせるようにしたいと思う。

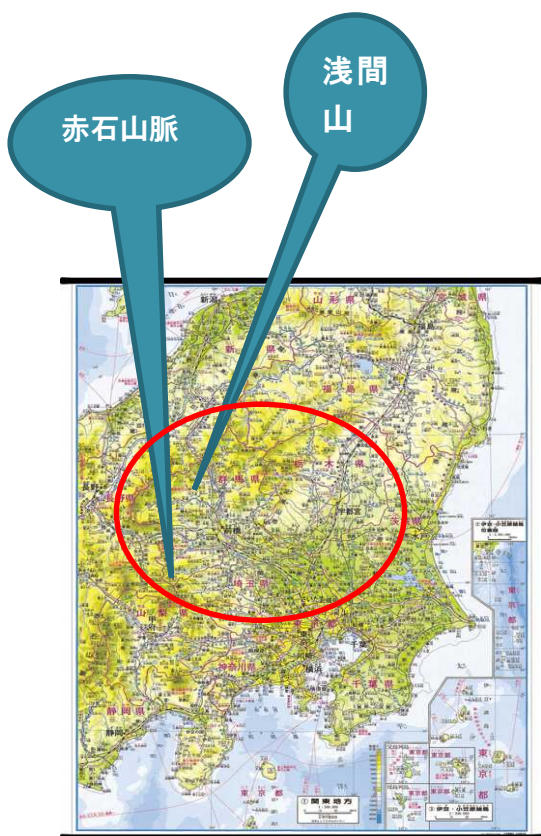


図 2

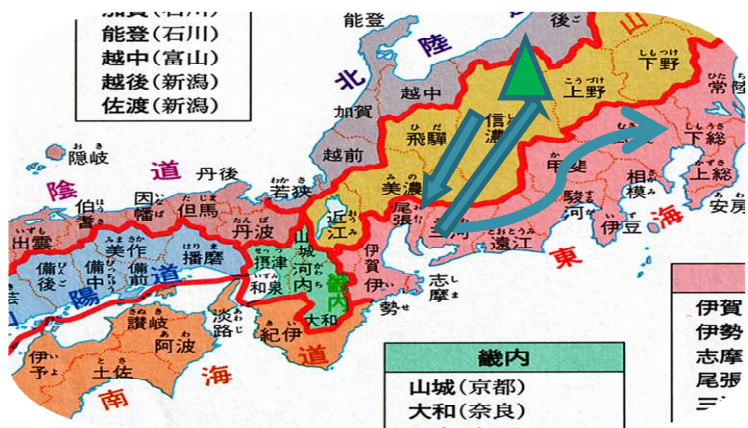


図 1